

# 高校生の「勉強意欲」

——進路多様校の普通科と専門学科を比較して——

高木 稚佳 (東京大学教育学部)

## ◇要約

- ◎高校生の勉強への意欲低下が深刻な問題となり、その中でも進路多様校に通う生徒の勉強離れは顕著である。しかし、分析の結果から、進路多様校の中でも、専門学科の生徒は普通科の生徒に比較して、勉強への意欲が高いことが示された。
- ◎専門教育には、過去に勉強への意欲が低かった生徒の意欲を上昇させ、もともと高かった生徒の意欲を維持させる働きがある。
- ◎また、生徒が教師のスキルを高く評価している、勉強が将来に役立つと感じている、といった要因が、意欲の上昇に寄与していることがわかった。

## 1 問題設定

本稿の目的は、高校生の勉強離れが問題となっている昨今、専門教育の効果に注目して、その解決策を提示することにある。

後述する調査結果が示すように、日本の高校生、特に進路多様校に通う生徒の学習意欲の低下は甚だしい。少子化による大学全入時代の到来や、学歴神話の崩壊など、意欲低下の背景は様々であるが、多くの高校生が勉強への意欲を失っているのは確かなようだ。

しかし、フィールドワークで専門学科の授業を見学した際、生徒たちは授業を楽しみ、その内容に興味を持って取り組んでいる様子が見受けられた。この時、大きな疑問が生じた。勉強への意欲の低下は、あたかも高校生全体で進み、特に進路多様校で程度が甚だしいと捉えられがちだが、実際には、学科によって差があるのではないだろうか。

本稿では、進路多様校の中から、都立普通科高校と都立専門高校の生徒を対象とし、両者の勉強への意欲を比較する。勉強への意欲、つまり「勉強意欲」は、勉強という「強制」のイメージと、意欲という「積極性」のイメージが相反することから、これまであまり注目されなかった概念である。「勉強嫌い」という言葉があらわすように、「勉強」という言葉それ自体に拒否反応を示す生徒が非常に多い。しかし、勉強は人生に不可欠のものであり、強制であってもそれを受け入れ、意欲的に取り組んでいくことが重要といえる。今の高校生に失われているものが、まさにその「勉強意欲」ではないだろうか。そこで本稿では、あえて「勉強意欲」という言葉で、高校生の勉強への意欲を検証していく。そして、高校生の勉強意欲を上昇させる要因を探っていきたい。

## 2 先行研究の検討

まず、高校生の勉強意欲の低下を示す調査を挙げたい。日本青少年研究所（2009）が行った、高校生の国際比較調査の結果によると、日本の高校生の1日の勉強時間は、10年前と比較して1.5時間ほど減少している。また、学校の勉強を「きつい」（「とてもきつい」＋「まあきつい」）と感じている高校生は約8割で、調査対象4か国（日本、アメリカ、中国、韓国）中もっとも多かった。日本の高校生の勉強への意欲が、際立って低いことがわかる。

一方、Benesse教育開発センター（2005）の調査では、「勉強しようという気持ちがわからない」という質問への回答を学年別に示している。それによると、「そう」（「とてもそう」＋「そう」）と答える生徒は、学年が上がるにつれて増加し、高校生でピークに達する（小学生で36.2%、中学生で56.3%、高校生で59.6%）。また、同調査には、高校生の家庭での平均学習時間が示されている。進学校に通う生徒が平日85.7分、休日120.5分であるのに対し、進路多様校に通う生徒は平日17.4分、休日23.6分であり、高校偏差値層による大きな開きがあることがわかる。

以上の調査の結果から、高校生の勉強意欲の低下が示された。次に、「意欲」についての先行研究を取り上げたい。しかし、勉強意欲は管見の限り研究の対象となっていないため、類似概念である学習意欲の向上を目的とした研究を見ていく。

市川（2004）は、学習とは「基礎から積み上げる」ものという伝統的な学習観に対し、「基礎に降りていく学び」という概念を導入している。勉強の動機づけが困難になった今日、基礎から積み上げる系統的な学習では、子どもの意欲を高めることは難しいという。そして、「日常的な行動、『こういうことがやりたい』ということがあって、その過程で必要感を持って学ぶ」（市川 2004: 54）ことの重要性を指摘する。

また、久富（2005）はPISA2003とTIMSS2003

の結果を検証し、日本の子どもたちにとって、「学校知識（学校で子どもたちが学ぶべきとされている知識）」は面白くない、楽しくない、役に立つとも思えないものであり、それでも「学校での学習に取り組まされるという事態が支配的な状況」（久富 2005: 16）にあることを指摘する。そして、「学校での学習がもっと生活にも労働にも将来にもつながり、またそれぞれの教科の背後にある学問・文化世界の面白さにもつながる、まさに興味が感じられ、役に立つだろうと感じられるような内容」（久富 2005: 17）になることを提案する。

市川と久富の指摘は、専門学科という選択肢を提案する本稿と論旨が似通っている。しかし、市川は「基礎に降りていく学び」タイプの授業の実践例をいくつか取り上げているにすぎず、本当に子どもの意欲が上昇しているのか、実証的に示されていない。久富の提案も、大まかな方向を示しているにすぎず、具体的な方法については言及されていない。他にも、和田（2003）は家庭からのアプローチで、日本教育方法学会（2006）は学習意欲の向上を目指した授業からのアプローチを提案している。これと同類の研究は枚挙にいとまがないが、その効果がデータによって立証されたものは少ない。

また、専門教育については、対人能力や学校適応にプラスの効果があることを本田（2005）が指摘しているが、勉強への意欲に対する効果はほとんど言及されていない。

本稿では、普通科と専門学科の生徒の勉強意欲を比較し、意欲を上昇させる要因を実証的に探っていく。

## 3 仮説

本稿で検証する仮説は、以下の通りである。

- 理論仮説1：専門教育は、過去に勉強意欲が低かった生徒の勉強意欲を上昇させ、もともと高かった生徒の勉強意欲を維持させる。
- 作業仮説1-1：中学時と比較し、勉強へ

の積極性が高まった生徒、高く維持された生徒は、専門学科のほうが普通科より多い。

○作業仮説 1-2：中学時と比較し、勉強を嫌いではなくなった生徒、勉強を嫌いではない状態が維持された生徒は、専門学科のほうが普通科より多い。

○作業仮説 1-3：中学時と比較し、将来も勉強する意欲が高まった生徒、高く維持された生徒は、専門学科のほうが普通科より多い。

●理論仮説 2：専門教育を受けている生徒のほうが、普通教育を受けている生徒より、教師のスキルを高く評価している。

○作業仮説 2：「教え方が上手な先生が多い」と感じている生徒は、専門学科のほうが普通科より多い。

●理論仮説 3：専門教育を受けている生徒のほうが、普通教育を受けている生徒より、勉強の将来への有用性を感じている。

○作業仮説 3：「高校で学んでいる内容は自分の将来に役立つ」と感じている生徒は、専門学科のほうが普通科より多い。

●理論仮説 4：教師のスキルを高く評価することは、勉強意欲を上昇させる、または高維持させる効果がある。

○作業仮説 4-1：「教え方が上手な先生が多い」と感じている生徒ほど、中学時と比較し、勉強への積極性が高まる、または高維持される。

○作業仮説 4-2：「教え方が上手な先生が多い」と感じている生徒ほど、中学時と比較し、勉強を嫌いではなくなる、または勉強を嫌いではない状態が維持される。

○作業仮説 4-3：「教え方が上手な先生が多い」と感じている生徒ほど、中学時と比較し、将来も勉強する意欲が高まる、または高維持される。

●理論仮説 5：勉強の将来への有用性を感じ

ることは、勉強意欲を上昇させる、または高維持させる効果がある。

○作業仮説 5-1：「高校で学んでいる内容は自分の将来に役立つ」と感じている生徒ほど、中学時と比較し、勉強への積極性が高まる、または高維持される。

○作業仮説 5-2：「高校で学んでいる内容は自分の将来に役立つ」と感じている生徒ほど、中学時と比較し、勉強を嫌いではなくなる、または勉強を嫌いではない状態が維持される。

○作業仮説 5-3：「高校で学んでいる内容は自分の将来に役立つ」と感じている生徒ほど、中学時と比較し、将来も勉強する意欲が高まる、または高維持される。

●理論仮説 6：生徒の属性や高校入学前の状況を統制しても、教師のスキルへの評価と、勉強の将来への有用感が、勉強意欲の上昇に寄与する。

○作業仮説 6-1：生徒の性別や文化階層、中学時の成績や勉強意欲、高校の入試難易度を統制しても、「教え方が上手な先生が多い」と感じることは、勉強意欲を上昇させる。

○作業仮説 6-2：生徒の性別や文化階層、中学時の成績や勉強意欲、高校の入試難易度を統制しても、「高校で学んでいる内容は自分の将来に役立つ」と感じることは、勉強意欲を上昇させる。

まず、本稿での「勉強意欲」の概念を定義する。勉強意欲とは、①勉強に積極的に取り組んでいるかどうか（勉強への積極度）、②勉強が嫌いかどうか（勉強嫌い）、③社会に出てからも勉強したいかどうか（将来も勉強する意欲）、という指標で示されるものとした。この3つの指標で、勉強意欲の高低を判断する。

次に、個々の仮説について説明する。理論仮説 1 では、過去と現在の勉強意欲の変化を、専門学科と普通科の生徒の間で比較する。専

門学科の生徒は、それまでの目的のわからない、もしくは外発的動機づけのみに支えられた勉強から解放され、勉強意欲が普通科の生徒より上昇すると予想した。専門学科には実習が多いからという理由だけでなく、座学の授業でも、実生活に役立つことがわかれば、勉強への態度も前向きになるのではないだろうか。また、受験やテストに追われて勉強する普通科の生徒よりも、社会に出てから、つまりそれらの外発的動機づけがなくなってからも、勉強への意欲が保持されると考えた。

理論仮説1で、専門学科の生徒のほうが、勉強意欲が上昇している、もしくは高維持されることが立証されれば、何がその要因となっているのかを解明しなければならない。

まず要因として考えられるのは、「教師のスキルへの評価」である。私立学校や予備校が人気になった理由の1つとして、教師のスキルの高さ（に対する信頼）が挙げられている。受験や教科に深い知識を持ち、それを生徒にわかりやすく教えるスキル、それに生徒は信頼感を持つのだ。フィールドワークで授業を見学した際、教師は特別な器具を扱ったり、熟達した技術を持っていたりし、それを生徒に見せる機会も多いようだった。生徒が教師を評価していることは、生徒の勉強意欲を高める働きがあると考えられる。

勉強意欲を高めるもう1つの要因については、再びBenesse教育研究開発センター(2005)の調査結果を参照したい。この調査では、高校生の約8割が勉強する理由として、「自分がつきたい仕事につくのに必要だから」を挙げている。ここから、高校生が勉強に向かう要因として、「勉強の将来への有用感」を挙げることができる。

したがって、理論仮説2と理論仮説3で、「教師のスキルへの評価」と「勉強の将来への有用感」について、専門学科と普通科の生徒間で比較する。そして、理論仮説4と理論仮説5では、それぞれが勉強意欲に与える効果を検証していく。

以上の分析から、教師のスキルへの評価や

勉強の将来への有用感が、勉強意欲の上昇に効果を持つことが証明された場合、最後にロジスティック回帰分析を行う。クロス集計の結果には、擬似相関が含まれている可能性があるからだ。そこで、理論仮説6で、生徒の属性（性別や文化階層）や高校入学前の状況（中学時の成績や勉強意欲）を統制しても、2つの要因の効果が認められるかを検証したい。

## 4 変数の設定

①勉強への積極度の変化：Q9A「学校での勉強に積極的に取り組んでいる」と、Q23A「学校での勉強に積極的に取り組んでいた」（中学2年生のとき）の質問に対し、それぞれ「とてもあてはまる」と「まああてはまる」の回答を「あてはまる」、「あまりあてはまらない」と「まったくあてはまらない」の回答を「あてはまらない」に、2分類した。Q23Aの回答が「あてはまらない」でQ9Aの回答が「あてはまる」ものを「低→高」とし、以下同様に、「あてはまる」から「あてはまる」を「高→高」、「あてはまる」から「あてはまらない」を「高→低」、「あてはまらない」から「あてはまらない」を「低→低」とした。なお、ロジスティック回帰分析では、Q9AとQ23Aに対し、上の「あてはまる」を「1」、「あてはまらない」を「0」とするダミー変数を使用する。

②勉強嫌いの変化：Q9C「学校での勉強が嫌いだ」と、Q23B「学校での勉強が嫌いだった」（中学2年生のとき）の質問に対し、①と同様の2分類をした。Q23Bの回答が「あてはまる」でQ9Cの回答が「あてはまらない」ものを「嫌→好」とし、以下同様に、「あてはまらない」から「あてはまらない」を「好→好」、「あてはまらない」から「あてはまる」を「好→嫌」、「あてはまる」から「あてはまる」を「嫌→嫌」とした。なお、ロジスティック回帰分析では、Q9CとQ23Bに対し、「あてはまる」



を「0」、「あてはまらない」を「1」とするダミー変数を使用する。

- ③**将来も勉強する意欲の変化**：Q9D「社会に出たら、もう勉強はしたくない」と、Q23C「社会に出たら、もう勉強はしたくないと思っていた」（中学2年生のとき）の質問に対し、①と同様の分類をした。なお、ロジスティック回帰分析では、Q9DとQ23Cに対し、「あてはまる」を「0」、「あてはまらない」を「1」とするダミー変数を使用する。
- ④**教え方が上手、勉強将来役に立つ**：それぞれQ18A「教え方が上手な先生が多い」、Q51E「高校で学んでいる内容は自分の将来に役立つものだと思う」の質問に対し、①と同様の2分類をした。
- ⑤**蔵書数**：Q28の家にある本の冊数に対し、「ほとんどない」を「0」、「20冊くらい」を「20」、「50冊くらい」を「50」、「100冊くらい」を「100」、「200冊くらい」を「200」、「300冊くらい」を「300」、「400冊以上」を「400」とした。本は家庭の文化的所有物であり、文化階層を測る指標になると考えられる。なお、蔵書数は100冊単位とした。
- ⑥**中2時校内成績**：Q24の中2時校内成績を、「下のほう」を「1」、「上のほう」を「5」とした。
- ⑦**入試難易度**：『2009年入試用 都立に入る!』に記載された、一般入試における60%合格基準の総合成績の得点を使用した。入試難易度は100点単位とする。なお、学力選抜

のない高校については、中2時成績平均値から入試難易度に対して回帰分析をして予測値を算出した。

## 5 分析

理論仮説1～3は、専門学科と普通科の比較であるため、分析にはウェイト1を使用した。まず、作業仮説1-1「中学時と比較し、勉強への積極性が高まった生徒、高く維持された生徒は、専門学科のほうが普通科より多い」を検証したのが、表1である。5%水準で有意となり、作業仮説1-1が支持された。また、表2と表3から、作業仮説1-2「中学時と比較し、勉強を嫌いでなくなった生徒、勉強を嫌いでない状態が維持された生徒は、専門学科のほうが普通科より多い」、作業仮説1-3「中学時と比較し、将来も勉強する意欲が高まった生徒、高く維持された生徒は、専門学科のほうが普通科より多い」も支持された<sup>1</sup>。

以上の結果から、専門教育には、過去に勉強意欲が低かった生徒の勉強意欲を上昇させ、もともと高かった生徒の勉強意欲を維持させる効果があることが示された<sup>2</sup>。次に、専門教育のどのような特徴が、勉強意欲の上昇に寄与しているのかを検証しなければならない。

表4から作業仮説2「『教え方が上手な先生が多い』と感じている生徒は、専門学科のほうが普通科より多い」が、また、表5から

表1 「勉強への積極度の変化」×「学科」

学科(2分類)	勉強への積極度の変化				合計	N
	低→高	高→高	高→低	低→低		
専門高校 (%)	34.1	21.9	8.0	35.9	100.0	(2,348)
普通科 (%)	30.2	18.2	8.7	42.9	100.0	(450)
合計 (%、参考)	33.5	21.3	8.1	37.1	100.0	(2,798)

5%水準で有意 p=0.027

表2 「勉強嫌いの変化」×「学科」

Q9C・Q23B×Q1B

学科(2分類)	勉強嫌いの変化				合計	N
	嫌→好	好→好	好→嫌	嫌→嫌		
専門高校 (%)	22.9	12.5	10.3	54.3	100.0	(2,339)
普通科 (%)	18.2	9.3	13.7	58.8	100.0	(451)
合計 (%、参考)	22.2	12.0	10.9	55.0	100.0	(2,790)

1%水準で有意 p=0.006

表3 「将来も勉強する意欲の変化」×「学科」

Q9D・Q23C×Q1B

学科(2分類)	将来も勉強する意欲の変化				合計	N
	低→高	高→高	高→低	低→低		
専門高校 (%)	20.1	19.3	8.8	51.8	100.0	(2,328)
普通科 (%)	16.3	17.0	11.2	55.5	100.0	(447)
合計 (%、参考)	19.5	19.0	9.2	52.4	100.0	(2,775)

10%水準で有意 p=0.068

表4 「教え方が上手」×「学科」

Q18A×Q1B

学科(2分類)	教え方が上手		合計	N
	あてはまる	あてはまらない		
専門高校 (%)	55.5	44.5	100.0	(2,364)
普通科 (%)	38.4	61.6	100.0	(445)
合計 (%、参考)	52.8	47.2	100.0	(2,809)

0.1%水準で有意 p=0.000

作業仮説3「『高校で学んでいる内容は自分の将来に役立つ』と感じている生徒は、専門学科のほうが普通科より多い」が支持された。

以上の結果から、勉強意欲を高めると推測される2つの要因は、専門学科の生徒により強く実感されていることがわかる。これ以降の分析は、専門学科と普通科の生徒を混合するため、ウェイト2を使用する。

表6から作業仮説4-1「『教え方が上手な先生が多い』と感じている生徒ほど、中学時と比較し、勉強への積極性が高まる、または高維持される」が、表7から作業仮説4-2

「『教え方が上手な先生が多い』と感じている生徒ほど、中学時と比較し、勉強を嫌いでなくなる、または勉強を嫌いでない状態が維持される」が支持された。一方、表8に見るように、将来も勉強する意欲が上昇したのは、「あてはまらない」のほうが高くなったが、「あてはまる」との差はわずか1.0ポイントである。高維持は「あてはまる」のほうが7.3ポイント高い。よって、作業仮説4-3「『教え方が上手な先生が多い』と感じている生徒ほど、中学時と比較し、将来も勉強する意欲が高まる、または高維持される」はおおむね

表5 「勉強将来役に立つ」×「学科」

学科 (2分類)	勉強将来役に立つ		合計	N
	あてはまる	あてはまらない		
	専門高校 (%)	63.2	36.8	100.0
普通科 (%)	37.2	62.8	100.0	(419)
合計 (%)、参考)	59.1	40.9	100.0	(2,696)

0.1%水準で有意 p=0.000

表6 「勉強への積極度の変化」×「教え方が上手」

教え方が上手	勉強への積極度の変化				合計	N
	低→高	高→高	高→低	低→低		
	あてはまる (%)	37.4	26.7	7.0	29.0	100.0
あてはまらない (%)	27.4	13.7	9.8	49.1	100.0	(1,515)
合計 (%)	31.9	19.6	8.5	40.0	100.0	(2,775)

0.1%水準で有意 p=0.000

表7 「勉強嫌いの変化」×「教え方が上手」

教え方が上手	勉強嫌いの変化				合計	N
	嫌→好	好→好	好→嫌	嫌→嫌		
	あてはまる (%)	25.2	13.5	10.3	51.0	100.0
あてはまらない (%)	16.0	8.0	14.2	61.8	100.0	(1,516)
合計 (%)	20.2	10.5	12.4	56.9	100.0	(2,774)

0.1%水準で有意 p=0.000

支持されたといえる。

表9から作業仮説5-1「『高校で学んでいる内容は自分の将来に役立つ』と感じている生徒ほど、中学時と比較し、勉強への積極性が高まる、または高維持される」が支持された。同様に、表10から作業仮説5-2「『高校で学んでいる内容は自分の将来に役立つ』と感じている生徒ほど、中学時と比較し、勉強を嫌いでなくなる、または勉強を嫌いでない状態が維持される」が、表11から作業仮説5-3「『高校で学んでいる内容は自分の将来に役立つ』と感じている生徒ほど、中学

時と比較し、将来も勉強する意欲が高まる、または高維持される」が支持された。以上の結果から、勉強の将来への有用感、勉強意欲を上昇または高維持させる効果があることが示された。

表12は、生徒の属性(性別や文化階層)や高校入学前の状況(中学時の成績や勉強意欲<sup>3)</sup>)を統制した、ロジスティック回帰分析の結果である。ここから、教師のスキルへの評価は、勉強への積極度の上昇と、勉強嫌いの改善に寄与しており、作業仮説6-1「生徒の性別や文化階層、中学時の成績や勉強意欲、高校の

表8 「将来も勉強する意欲の変化」×「教え方が上手」

Q9D・Q23C×Q18A

教え方が上手	将来も勉強する意欲の変化				合計	N
	低→高	高→高	高→低	低→低		
あてはまる (%)	17.4	21.8	8.1	52.7	100.0	(1,254)
あてはまらない (%)	18.4	14.5	11.5	55.6	100.0	(1,499)
合計 (%)	17.9	17.8	10.0	54.3	100.0	(2,753)

0.1%水準で有意 p=0.000

表9 「勉強への積極度の変化」×「勉強将来役に立つ」

Q9A・Q23A×Q51E

勉強将来役に立つ	勉強への積極度の変化				合計	N
	低→高	高→高	高→低	低→低		
あてはまる (%)	35.8	25.8	7.1	31.3	100.0	(1,255)
あてはまらない (%)	29.1	13.7	9.2	48.0	100.0	(1,376)
合計 (%)	32.3	19.5	8.2	40.0	100.0	(2,631)

0.1%水準で有意 p=0.000

表10 「勉強嫌いの変化」×「勉強将来役に立つ」

Q9C・Q23B×Q51E

勉強将来役に立つ	勉強嫌いの変化				合計	N
	嫌→好	好→好	好→嫌	嫌→嫌		
あてはまる (%)	24.4	11.5	13.1	51.0	100.0	(1,252)
あてはまらない (%)	16.2	9.8	11.2	62.8	100.0	(1,378)
合計 (%)	20.1	10.6	12.1	57.2	100.0	(2,630)

0.1%水準で有意 p=0.000

入試難易度を統制しても、『教え方が上手な先生が多い』と感じることは、勉強意欲を上昇させる」は、部分的に支持された。勉強の将来への有用感は、3つの指標すべてに対して有意であり、作業仮説6-2「生徒の性別や文化階層、中学時の成績や勉強意欲、高校の入試難易度を統制しても、『高校で学んでいる内容は自分の将来に役立つ』と感じることは、勉強意欲を上昇させる」は支持された。勉強への積極度の上昇、勉強嫌いの改善、将来も勉強する意欲の上昇のいずれにおいても、両者のオッズ比は比較的高いことも注目に値する。

## 6 結論

本稿の分析から、同じ進路多様校でも、普通科より専門学科の生徒のほうが、勉強意欲が高いことが示された。また、勉強意欲の上昇や高維持の要因は専門教育にあること、その中でも、教師のスキルへの評価と勉強の将来への有用感に効果があることがわかった。

高校生の勉強への意欲低下が進み、その傾向が進路多様校で顕著である現在、この結果は示唆的である。これまで生徒の勉強への意欲を鼓舞するため、時間数・内容量の削減や



表 11 「将来も勉強する意欲の変化」×「勉強将来役に立つ」

Q9D・Q23C×Q51E

勉強将来役に立つ	将来も勉強する意欲の変化				合計	N
	低→高	高→高	高→低	低→低		
あてはまる (%)	21.4	22.4	9.4	46.9	100.0	(1,248)
あてはまらない (%)	14.7	14.2	10.4	60.7	100.0	(1,363)
合計 (%)	17.9	18.1	9.9	54.1	100.0	(2,611)

0.1%水準で有意 p=0.000

表 12 勉強意欲の規定要因（ロジスティック回帰分析）

独立変数	勉強への積極度		勉強嫌いでない		将来も勉強する意欲	
	偏回帰係数	オッズ比	偏回帰係数	オッズ比	偏回帰係数	オッズ比
女子ダミー	0.209	1.232**	-0.150	0.860	0.046	1.047
蔵書数（100冊）	0.039	1.039	-0.051	0.950	0.267	1.307***
中2時校内成績	0.028	1.028	0.023	1.024	-0.227	0.797***
入試難易度（100点）	-0.139	0.870+	0.043	1.044	0.098	1.103
中2時勉強意欲	0.940	2.560***	0.885	2.423***	1.783	5.949***
教え方が上手ダミー	0.800	2.225***	0.780	2.181***	0.133	1.143
勉強将来役に立つダミー	0.737	2.090***	0.250	1.284**	0.601	1.825***
（定数）	-0.383	0.682	-1.722	0.179***	-1.601	0.202**
Nagelkerke 決定係数	0.167		0.099		0.228	
モデル適合度	p=0.000		p=0.000		p=0.000	
N	2,577		2,570		2,559	

注) +: p<0.10、\*: p<0.05、\*\*: p<0.01、\*\*\*: p<0.001。

総合的な学習の時間の実施など、様々な試みがあったが、高校生の意欲が上昇したというデータは管見の限りでは存在しない。しかし、本分析の結果から、特に意欲の低下が顕著である進路多様校の中でも、専門学科においては勉強への意欲が比較的高いことが証明された。勉強意欲の上昇、または高維持に、教師のスキルへの評価、勉強の将来への有用感といった要因が寄与していることが示されたが、これらは専門学科ならではの特色ではないだろうか。教師の熟達したスキルを実感したり、今勉強していることが自分の将来に役

立つと感じたりする機会は、普通科では相対的に少ない。これら2つの要因で勉強意欲の上昇を十分に説明しているとはいえないが、生徒の属性や入学前の状況を統制しても効果がある点で、この結果の意義は大きい。他の要因の検証は、今後の課題としたい。

以上の考察から、本稿の結びに、高校生の勉強への意欲を上昇させる方法の1つとして、専門学科という選択肢を示したい。本稿の調査対象は都立専門高校だったが、東京都では他県より普通科志向が強く、専門学科という進路は中学生にあまり開かれていない。

大学入試に有利な普通科が好まれるのは無理もないが、そこで大学進学前に勉強への意欲を失ってしまうのであれば、本末転倒である。

高校生を勉強へ向かわせるためには、そもそも高校を選択する際に、専門学科を含めた広い選択肢を与えるべきではないだろうか。

#### 〈注〉

- 1 作業仮説1-3は、10%水準で有意である。
- 2 中学時の勉強意欲は、専門学科と普通科の生徒間に有意な差は見られなかった。また、現在の勉強意欲は、専門学科の生徒のほうが5%水準で、3つの指標すべてにおいて高かった。
- 3 従属変数が勉強積極度のときは、中2生のときの勉強積極度を、独立変数（中2時勉強意欲）に使用する。同様に、勉強嫌いのときは、中2生のときの勉強嫌いを、将来も勉強する意欲のときは、中2生のときのそれを使用する。

#### 〈引用文献〉

- Benesse教育研究開発センター、2005、『第1回子ども生活実態基本調査報告書』（株）ベネッセコーポレーション  
[http://benesse.jp/berd/center/open/report/kodomoseikatu\\_data/2005/index.shtml](http://benesse.jp/berd/center/open/report/kodomoseikatu_data/2005/index.shtml), 2009.2.28).
- 学研編、2008、『2009年入試用 都立に入る！』学習研究社。
- 本田由紀、2005、『多元化する「能力」と日本社会——ハイパー・メリトクラシー化のなかで』NTT出版。
- 市川伸一、2004、『学ぶ意欲とスキルを育てる——いま求められる学力向上策』小学館。
- 久富善之、2005、「国際調査に表れた日本の子どもの学力をどうみるか」『作文と教育』6（臨時創刊号）：8-18。
- 日本教育方法学会編、2006、『学習意欲を高める授業——どのような学力を形成するのか』図書文化社。
- 日本青少年研究所、2009、「中学生・高校生の生活と意識——日本・アメリカ・中国・韓国の比較」  
<http://www1.odn.ne.jp/youth-study/research/2008/gaiyo.pdf>, 2009.2.28).
- 和田秀樹、2003、『家庭からの学力向上プラン「子どもを勉強に向かわせる本」』小学館。